

群馬県インクルーシブ教育推進有識者会議（第2回）結果

1 報告内容

（1）海外視察報告

目 的：先進的に実践している北欧の学校や行政機関の視察と意見交換

日 程：令和6年9月15日～9月22日

視察先：デンマーク義務教育学校2校、スウェーデン義務教育学校3校、不登校対応校2校、大学1校、行政1市

（要旨）

- ・法体系、日本で言えば、幼稚園の年長から義務教育としてスタートして学び始める。
- ・デンマークにおいては、中学三年生が終わった後、十年生として残り学ぶことも可能。
- ・高校には入試がない。
- ・個別支援教育の体制は、デンマークは特別支援学校、特別支援学級の設置あり。
- ・スウェーデンは、特別支援学校は知的障害と聴覚障害。特別支援学級の設置なし。聴覚障害の特別支援学校では、手話の学習もしている。
- ・1学級の規模は 20～30名程度。
- ・デンマークでは、課題について考える場面など、教師が許可をすると授業中でも子供が自由に席を離れ、学び合う姿が見られた。隣の人と話し合うではなく、自然なグループ形態。
- ・一人で学びたい、考えたい子もあり、自分で課題を決めることもある。
- ・日本のような一斉スタイルではなく、班別あるいは個別学習といった授業スタイルが主であった。
- ・自分の席に座り続けて話を聞くことが苦手な子供も、周りの子供たちが思い思いに学習を始めるため、目立つこともなく取り組んでいるように見えた。
- ・自然で自由な学び合いができるのは、小さい頃からの繰り返しもあるが、教師の協働的な関わりにもよるものも大きいと考える。
- ・管理的でなく、子供を信頼し、対等に関わっていく、そんな教師の姿であった。
- ・教師は授業の課題を示した後、子供と共に課題を考えていく。このような教師の姿を見本とし、子供たちが学び合っていく様子であった。
- ・視察した授業は1時間に1課題。すぐに終わる子は個人端末で様々な課題に取り組んでいた。
- ・子供それぞれが端末を中心として調べ学習、教科書の解説動画視聴など、必要な情報を集めていた。課題の解決ツールとして利用するだけでなく、発展的な学習、自分の理解に合わせた課題に取り組むためのツールとしても活用されていた。
- ・スウェーデンは、子供が自ら動いたり、見通しをもったりする仕組みとして、週予定、授業の流れや板書、ピクトグラムが全ての授業、教室に示されていた。群馬県でも特別支援学校ではよく使われるが、通常の小中学校で使われていることは参考となった。
- ・教科書も含め、教材教具は貸与する体制となっている。イヤーマフやデスクトップパーテーションなどは教室の片隅にあり、必要と感じた子供は気軽に利用できる仕組みとなっていた。
- ・誰でも必要な時に使えることが浸透しており、使う子供がいても奇異な目で見られる雰囲気はなかった。
- ・貸与する体制は、家庭の貧富や学校への理解度など、様々な家庭状況によって生まれる教育格差を埋めるものになると考えられた。

- ・一人で集中したい子供は、グループホームと称する小部屋が各教室の隣に設けられており、いつでも利用できるようになっていた。
- ・教室だけではなく、集会室や別室のように、教室外で子供たちが話し合えるスペースが豊富にあることが施設面での特徴と感じた。
- ・自分の席でみんなと同じペースで学習し続けるのではなく、それぞれが必要な時に必要な場所で必要な物を使って、それぞれの進捗で学んでいるという状況であった。
- ・このような雰囲気の中でも学校に馴染めない不登校の子供もいる。スウェーデンでは、不登校の子のための学校が設けられており、子供本人や保護者と学習方法や方針を決めており、地元の学校に戻って学ぶことを目指している。
- ・視察した不登校対応校は、5名程度の小グループで学ぶ学校。さらに難しい場合は個別で学ぶ学校もあった。
- ・中学年以下は在籍している学校が指導をしている。
- ・高学年以上で不登校対応校を希望する場合は、在籍校の校長先生が申し出ることで、入学のための協議が行われる。その子にとってどんな教育が必要で、どうすると元の学校で学べるのか、個別の計画が立てられる。
- ・不登校対応校は、特別支援教育教員が在籍しているが、通常校における指導については助言していない。別市の機関が行う。市では、特別支援教育についての研修会を実施しているとのこと。
- ・不登校になる前、集団に馴染めない子、特別な支援が必要な子も含め、教室での学習が難しい子供のための別室学習ができる場所が確保されている。
- ・特別支援学級はないが、別室学習できる場所は、特別支援学級的であり、担当教員もいる。事前にスケジュールを組んで学習している子や全て別室で学習する子もいる。また、教科担当の教員が来て指導することもある。
- ・聴覚障害の子の別教室もあった。
- ・子供が悩みを抱えているのはスウェーデンも同様。そのため、健康チームと相談員が設置されている。
- ・健康チームのメンバーは、校長、SC、SSW、看護師、言語聴覚士、特別支援教育教員、学校医。困難を抱える子の洗い出し、校長への報告、校内支援や外部機関につなげる組織で月1回会議をもっている。
- ・相談員は、生徒指導主事のような職員が専任でおり、絶えず校内を巡回し、子どもに声をかけており、子供にも信頼されているとのこと。また、相談室があり誰でも相談ができる。
- ・デンマークでは、ペタゴーという大学卒の専門的な知識を身に付けた生活指導員がいる。種々の会議に加わり、支援方法について意見を述べたり、支援が必要な子の授業支援に入ったりしている。
- ・学童保育は、デンマーク、スウェーデンともに教育委員会の管轄。学童保育の職員は学校の授業支援にも加わる。
- ・学童保育は登校前も開いており食事の提供もある。
- ・学校には、教員以外の様々な職員が組織的に関わり合いながら子供を支える仕組みになっている。教員が授業に専念できる環境が整えられていると感じた。
- ・デンマークにおいて、教員の印象的な話として、学校外で起きたことは家庭の責任、学校外での出来事で学校が知ることがあれば保護者に情報提供できるが、それは家庭での指導。そ

んな言葉があった。

- ・スウェーデンでは、聴覚補助設備が充実しており、専用のマイクを使って普段の授業から利用している。教室の他、体育館にも整備されていた。
- ・スウェーデン、ルンド大学では、学生の訴えにより合理的配慮を実施しており、要求は年々増加しているとのこと。
- ・デンマーク、スウェーデンの子供たちの姿の印象としては、笑顔が多く、友だちと自ら関わりながら学びを楽しんでいる様子であった。それは、高校入試を前提としない、子供の興味に基づいた学習と自由な学び合い、自由進度学習、教師の関わり方、子供が教師にもつ安心感、誰かが自分の悩みを聞いてくれる安心感があると考えられる。
- ・教員の意識としては、特別な支援が必要な子供は、特別な支援を提供できる場所に行って学ぶことが良いという考えがある。誰にでも必要な支援を提供し、基本は一緒に学ぶ。一時的に別の場所に行っても戻って来ることができるようにするという意識が強いように感じた。
- ・スウェーデンの教員が課題として感じていることは、知的障害のある子供の教育課程と、ない子供の教育課程、異なる教育課程の子供に対して、同じ教室で同時に授業を行うことの難しさがあるとのこと。共通点を見出して指導したり、研修を実施したりしているが難しいとのことであった。
- ・今後の展望として、視察先の学校とモデル校との交流を検討中。また、教員が子供一人一人のニーズに合った支援をするだけでなく、子供同士が多様な背景を理解する心を育てていくことで、誰もが居やすい心理的安全性のある空間をつくっていきけるようにしていきたい。

2 理解啓発イベント報告

目 的

- ・群馬県における共生社会の実現を目指し、年齢、性別、国籍、障害によらず、すべての子供たちが同じ場所で共に学ぶインクルーシブ教育を推進すること。
- ・インクルーシブ教育推進に係る疑問や障壁など、幅広い意見交換や調査・研究、教育実践に係る報告を行い、県民への理解と啓発を図ること。

イベント名：ぐんまインクルーシブフェスタ2024 ～ちから合わせる190マンパワー～

日 程：令和6年12月6日（金）～12月10日（火）

内 容：12月6日（金）県庁1階県民ホール

- ・ハートフルアート展 ※12月10日まで開催
- ・統一ロゴマークの紹介
- ・特別支援学校作業製品販売会
- ・「ダブルニジマスバーガー」の販売
- ・高校と特別支援学校によるステージ発表

12月7日（土）県庁32階NETSUGEN

- ・群馬県インクルーシブ教育推進に係るシンポジウム

12月8日（日）県庁2階ビジターセンター

- ・就労継続支援事業所を題材とした映画「うたうかなた」の上映
- ・トークセッション

来場者数：約4,500人

(1) ハートフルアート展

- ・今年からインクルーシブフェスタの位置付けとして同時開催。
- ・特別支援学校児童生徒の図工美術作品の展示。
- ・段ボールアートなどの体験コーナーも設置。
- ・今年で第30回、記念の映画上映会やトークセッションも行った。

(2) 統一ロゴマークの紹介

- ・愛情をテーマに、県内特別支援学校の生徒がつくったハートのマークを集めて群馬県の形にデザインしたもの。
- ・統一ロゴマークを付与することで、質の高い作業性品のブランド化を図る。
- ・付与された学校の生徒が作業製品の紹介をした。

(3) 作業製品販売会

- ・今年からインクルーシブフェスタの位置付けとして同時開催。
- ・自立と社会参加のために必要なことを学ぶ作業学習の時間において製作をした。
- ・お客様との直接的なやりとりを通して、新たな学びの姿が見られた。

(4) 「ダブルニジマスバーガー」の販売

- ・藤岡北高校、藤岡工業高校、万場高校、藤岡特別支援学校が共同開発したもの。
- ・バンズ、パテ、焼印、パッケージデザインなど、役割を分担して製作。
- ・販売終了時刻前に完売するほど大人気であった。

(5) ステージ発表

- ・桐生清桜高校と渡良瀬特別支援学校が和太鼓のコラボ演奏をした。企画を打診した際、高校から「やりたい」と積極的な発言があり実現した。音が重なり迫力のある演奏であった。
- ・桐生商業高校と渡良瀬特別支援学校がダンスと和太鼓でコラボした。日頃から交流及び共同学習で関係を築いている関係。息がぴったりと合い華やかで迫力のある発表であった。
- ・盲学校軽音楽部による演奏は、日頃校外で演奏する機会がない中で、一人一人が輝き、会場が湧き上がる素晴らしい演奏であった。

(6) 来場者の声 ※アンケートより一部抜粋

- ・活気があってよかった。
- ・作品に個性や思いが表れていて言葉ではなく思いを伝えるきっかけになると思った。
- ・素晴らしい製品ばかりで心が洗われた。
- ・ステージ発表素晴らしかった。来年もぜひ演奏してほしい。
- ・ダブルニジマスバーは肉厚でおいしかった。

(7) シンポジウム報告 ※一部抜粋。要旨は別途ホームページへ掲載済。

目 的

- ・調査、研究、教育実践に係る報告を行い、県民への理解と啓発を図ること。
- ・共生社会の実現、インクルーシブ教育推進に係り、疑問や障壁など、幅広い意見を聞くこと。

テーマ：共生社会って何だろう ～今私たちにできること～

日 時：令和6年12月7日（土）

場 所：県庁32階 NETSUGEN（官民共創スペース）

内 容：・群馬県インクルーシブ教育推進事業説明
・海外視察報告（デンマーク、スウェーデン）

- ・モデル校実践研究報告
- ・登壇者より情報提供
- ・トークセッション

司 会：宮坂あつこ 氏（FM桐生アナウンサー）

登壇者：霜田 浩信 氏（群馬大学共同教育学部 教授）

山本 泉 氏（特定非営利活動法人カウンセリング & コミュニケーション・ミュー 代表）

平野勇パウロ氏（株式会社アルテソリユーション 代表取締役）

高木沙祐里 氏（ダスキン障害者リーダー育成海外研修派遣事業 研修修了生）

増田 眞次 氏（玉村町立上陽小学校長）

- ・カフェやワーキングスペースを併設したオープンスペースで開催。
- ・教育関係者、一般人含む 57 名の参加者あり。

（登壇者より情報提供）

A氏

- ・群馬大学附属小学校と附属特別支援学校が行ってきた教科での交流及び共同学習をとおして考えるインクルーシブ教育について紹介。

B氏

- ・不登校の子や所属のない卒業生、保護者支援としてのアウトリーチ支援について紹介。

C氏

- ・移住後の体験談や多文化共生に興味がない人へどう発信していくかについて紹介。

D氏

- ・障害はその人全てを語るものではなく、深い関わりをもつからこそ見えてくる側面があり、その人がどんな人なのか関心をもつ大切さについて紹介。

（トークセッション）

- ・話題提供などを基に、インクルーシブ教育、共生社会を目指していくための軸になる考え方とは何かについて意見交換。
- ・子供たちや地域で暮らす人たちが、互いに違いを感じながらも、そこにいる人たちが共通する何か（例えば、スポーツや料理、音楽など）をもち得ていくことが大事。
- ・価値観の違いはあるが、相手が何を楽しんでいるのか、何を一緒にやりたいのかがあるからこそ、また次に進んでいけるのではないかな。
- ・支援する側、される側でなく、自分でできること、したいことを相手と共有していくことが大事。
- ・相手の価値観を知る前に、相手のフィールドに入って、何が好きで、どんなことを楽しみにしているのか、どんなことに苦しんでいるのかも含め、互いを知り合い、そこから価値観として何を大事にしているのかが分かってくると一緒に考えて進んでいけるのではないかな。
- ・シンポジウムをとおして、自分自身がどのようにインクルーシブに関わっているかということがわかった。

（来場者より意見）

- ・教育と福祉、地域、医療機関、各福祉関係と密接に連携してほしい。
- ・各学校種における教育支出額の割合などについて

3 モデル校実践研究報告

(1) 理念の周知と研修 ※モデル校長が作成した図の説明。

- ・現状は、左図のように一斉学習で適応が難しい場合は、特別支援学校、特別支援学級、通級指導教室、日本語教室と学びの場が固定的、分離された状態になっている。
- ・中心の図は、今後実現したいと考えるイメージ図。一斉学習に自由進度学習を組み合わせている。分離された状態を流動的にして特別支援学校から通常学級へ、通常学級から言葉の教室へなど、行き来ができるようにしたい。
- ・右図は、今後さらに実現したいと考えるイメージ図。特別支援学級などのくくりがない状態。全ての子供が通常学級で学び方を選択しながら学んでいけるシステム。「スーツケーでなく風呂敷で」（※引用：大空小、木村素子校長）子供たちが学校に合わせるのではなく、学校が子供たちに合わせられるような学校にしていきたいという思いが込められた図。
- ・「教師が教える授業」から「子供たちが主体的に学ぶ授業」への転換を目指していきたい。

(2) ブロックチーム担任制

- ・モデル校では、今年度からブロックチーム担任制を取り入れている。
- ・1学級1担任でなく、一定期間で担任が替わる。5、6年生を一緒にして4人で4学級をもっている。
- ・支援学級の子供やYUMEルーム（校内支援室）を利用している子供が入ってきた際も5、6年生の同じ仲間として4人の教員が見ている。
- ・昨年度は、低中高学年を3ブロックに分けて校外学習を実施した。異学年が混ざること、学年を越えた多様な児童の学び合う姿が見られた。

(3) 校内支援室 YUMEルームの新設

- ・いろいろな不安をもつ児童が安心して学校に来られる空間づくり。
- ・落ち着いた空間、自分に合ったペースで学習、生活できる環境
- ・児童は誰でも、いつでも利用できる。
- ・教員はローテーションで入っている。

(教員の意識を高める校内研修の実施)

- ・カリキュラムマネージャーは、障害者アートの研修も行っている。
- ・全盲の芸術家による障害者理解の研修も実施。

(4) 文科省事業を活用した交流及び共同学習の研究①

- ・今年度、カリキュラムマネージャーを3名配置し、上陽小学校と伊勢崎特別支援学校の教育課程のすり合わせをして交流及び共同学習を実施。
- ・カリキュラムマネージャーは、両校の授業者の意図や思いをくみ取りながら授業づくりや授業しやすい環境を整えている。
- ・10月から授業開始。リモート、対面で全6回を予定。
- ・対象は、上陽小学校知的特別支援学級6人、伊勢崎特別支援学校3年生6名。
- ・文科省の事業は通常学級と特別支援学校との交流及び共同学習であるが、子供や教員が混乱しないよう今年度については特別支援学級と特別支援学校とで行っている。
- ・今後、両校の教師に授業を見てもらい、自分たちにもできそうだなと思えるようにしていきたい。
- ・月に1回、各関係者が集まり授業づくりについて協議している。

(5) 文科省事業を活用した交流及び共同学習の研究②

- ・「おいもでぺったん」※対面での交流及び共同学習
- ・自立活動的な視点として、関わり合う場面を意図的に取り入れた。
- ・成果として、グループ毎に1枚の紙に版を押すことで、子供同士の自然なやりとりが生まれた。
- ・課題としては、もう少し子供たちに任せる場面が多いとよかった。また、ねらいを明確化することが大事。

(6) モデル校長

- ・関わるからこそ学べるというところが非常に大きなキーワードになる。
- ・通常学級にも特性のある子がいる。多様であるという認識を教師側がもち、もう一度通常学級での学習というものを見直すことで、授業が多様な形になっていくと思う。
- ・今後は図工や美術での交流及び共同学習を通常学級においても行っていきたい。さらには国語や算数でも行えないかと模索しているところ。